

日本林業の課題と今後の在り方

岩井 吉彌

宮崎県は、日本一のスギの生産県ですが、伐採跡地の三分の一しか再造林されていなどと言われて
います。

それは、再造林すると、林業の採算が採れなくなるからです。

では輸入される外材の生産地では、再造林して、林業の採算は採れているのでしょうか。採算が
採れているとしたら、何故なのでしょう。

私は大学で林業経済を研究し、教育してきましたが、その間広く、諸外国で木材産業や林業につ
いての実態調査を行ってきました。

それによって、日本の林業と海外の林業とを比較してみますと、圧倒的に外国林業の方が経営的
には有利であり、収益は十分に得られて、一般市民の投資の対象にさえなっているのです。

それに対して、我が国は、天然更新は難しく、気候が温暖で雨量の多い気候であるために、雑草
が茂りやすく、植林・育林過程で膨大な費用が掛かります。その上に、山地の地形が急峻であ
るために、林道の建設が容易でなくて、伐出に多くの費用が掛かります。

育林費用は世界標準の10倍、伐出費用は3倍程度かかることから、我が国林業がコストにおいて外
国林業と競争していくのは極めて難しいと考えます。

その上に、外国の場合は寒冷気候であるために、比較的成長が遅くて枝も細いことから、枝打ち
をしなくても、一般的に年輪幅が小さくて、節も小さいのです。

我が日本人は、木にこだわる国民であり、節が少なく目細の木材を好むため、外国で生産され
た木材の中で最も材質のいいものを厳選して輸入しています。

我が国の林業地は、有名林業地をのぞいては、植林の歴史は戦後からで新しく、枝打ちもあまり
してきませんでした。だから我が国の杉ヒノキ一般材は材質的には、それほどいいものではなく
て、厳選された輸入材に比べて劣っていると言えます。最近では、コストをかけて枝打ちをして
も、それに見合った木材価格にはなりません。

以上のことから、我が国林業は、外国林業に比べて大変不利な立場にあり、その結果、採算が採
れなくなっているのです。

最近では、バイオマスエネルギーとしての木材が注目されていますが、それを目指しても、エネ
ルギー用は単価がとても低いため、林業の採算に寄与するどころか、ますます林業経営の足を
引っ張ることになるでしょう。

従って、我が国林業は、正面切って外国林業と競争していくのは不可能だと考えています。

そうすると、間隙をぬった、正にニッチなところでしか生きてはいけません。

吉野林業のような膨大な蓄積を持っている林業は、今後も維持できるでしょうが、それ以外の林
業は、いろいろな工夫をしなければ存続出来なくなるでしょう。

家族だけで林業を行い、育林だけでなく伐出までも行うのも一つの方法でしょうし、森林から、
木材以外の産物を生産するのもいいでしょう、テレワークと組み合わせて、林業をするのもいい
と思います。

要するに今までの常識にとらわれない、新しく多様な考えで林業を行っていくべきでしょう。